

子供の頃、民家の玄関が並ぶ里地、里山の路上を外れ、森へ分け入り、探検ごっこをしました。沢筋から民家に出、人気を窺いながら、他人の家の庭先へ踏み込む時は、森から出て来た動物気分でした。岩登りに熱中した大学生の頃、壁に通じる道は森でした。両者ともに、行動時、人間社会と自然界には森を通過する時点で見えないバリアを感じました。大人になって欧州アルプス登攀時、彼らの社会では、森は時空を超え隔絶された場所ではなく、山野、溪谷

緑のエキスパート



と人との共生や、森からの恩恵が他国では身近で、親しく受けられる意識ですが、日本では森または木々の機能は、地球温暖化防止用CO₂削減面くらいで役立つ程度にしか考えられていないように思えます。森の持つ計り知れない能力が、地球環境全体の保護者の機能だと知るべきでしょう。ちなみに私は、森林マラソンを中心とした森林内を走る、遊ぶ、学ぶ大会を提唱し、東京・北海道・九州で多くの関係者の御努力の下、15年余り続けさせていただいています。

も含め自家の庭的存在のよう気付きました。編み物や読書まで、森の中のベンチに座ってしていましたから。20世紀後半、文明の発達や外庄により、日本では薪炭林や木材生産林の経済的機能が疲弊し、現在でも、諸外国と比較すると、森に対する各種の働きかけは一握の人々の努力と思いに支えられている感があります。

国土に占める森林率が先進諸国中最上位グループの日本は森林王国ですが、森林・林業その他、専門家ではなく一庶民の目で見ると、森

す。他の大会に比し、参加者は森の持つ気持ち良さを享受し、とても紳士的です。森林管理署の御協力で植林、育成も地元の子供達と私の仲間で行ってきました。森に力を育まれ、子供達の成長ぶりが見事でした。

21世紀初頭、日本の研究者たちが発見した森の持つ予防医学的效果を普及すべく、国内、国際的な活動のお手伝いをしています。地方自治体を中心とした「森林セラピー基地・ロード®」が、現在33都道府県に53か所ありますが、

整備され歩き易いこの森林空間は、海外に勝るとも劣らない場になっており、米大手新聞社が「日本は森林を科学した」と報道して以来、現在多くの海外メディア・学者等が視察に来ています。その理由は、国際社会が予防医学を重視し、研究が国際的に認められたためでしょう。米国は支部作りを始め、欧州ではCOST^{*}が公衆衛生の一角に森林医学を取り入れ、韓国は莫大な予算を使い日本の基地類似の地域を設置しました。私は、世界的に森林の機能が認めら

●プロフィール
1942年東京生まれ。東京女子医科大学卒業、医学博士。
東京農業大学客員教授。NPO法人森林セラピーンサエニティ理事長。
1967年女性パーティの隊長として世界初ヨーロッパアルプス・マッターホルン北壁登攀に成功。69年アイガー北壁、71年グランドジョラス北壁と、女性で世界初の欧州三大北壁完登者となる。
医学と登山活動等で得た知識や体験をもとにした講演・執筆活動を行っている。

れ整備され、常に活力ある緑が地球の保護者として機能する社会を望んでいます。特に、気候変動の激しくなった昨今、森林の持つ気候緩和機能だけでも正常に働いて欲しいと思いますので、環境、健康、観光で庶民が森へ行き、林業、木製品と親しみ、森林率90%前後の市や町村が経済的にも豊かになる社会を期待しています。